



日 口 交 流

発行 : 特定非営利活動法人 日口交流協会

E-mail:nichiro@nichiro.org

Home Page http://www.nichiro.org

〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-14 麻布台マンション401号

Tel : 03 (5563) 0626 Fax : 03 (5563) 0752



エカテリンブルグからのお客様

千葉 麻里

1月にエカテリンブルグから情報文化センター「日本」のガリーナさんとワレンチンさんが、大学の会議に出席するため来日するという知らせが入りました。ガリーナさんは露日協会エカテリンブルグ支部長でもあり、ワレンチンさんは日本語の先生として活動しています。お二人には3回にわたる日本文化交流団や、昨年末の日露青年交流プログラムで随分お世話になりました。短い滞在ですが何かお返しをしなければと思い、希望を聞きながら時間の調整をしてお待ちしました。



にいき、青少年交流、文化交流について色々な意見交換ができました。ガリーナさんの来日の大切な目的のひとつであったので、お手伝いできてほっとしました。センターはエカテリンブルグとの関係は長く、若い人たちを招待したこともあり、皆さん歓迎ムードで対応してくれました。

27日に田原町近くのホテルに落ち着いたということで、交流団や交流プログラムに参加したメンバーにも声をかけました。28日朝、ホテルまで迎えに行き、上野の東京国立博物館へ。ここは常設展示も充実しており、仏像から陶器、漆器、きもの、絵画、墨蹟等歴史的な説明、地域の文化の展示も豊富なので、日本文化に関心のある方には是非立ち寄ってもらいたい所です。この日は雨で入れませんでした。広い庭には茶室もいくつかあり建造物も見逃せません。お二人とも目を皿のようにして、時折質問しながら丹念に見ていました。時間が足りなかったのが残念でした。

その後、御茶ノ水の折り紙会館へ。丁度、小林館長さんが実演中で、楽しい話をしながら折り紙を折る様子を拝見しました。ここには何度か海外の方を案内してきているので、「お久しぶりです」などと挨拶を交わしていると、「そういえばロシア大使館の大使ご夫妻が見えたよ」とロシアの話に花が咲きました。見学にいらしていたご婦人方は、後で何うと活け花インターナショナルの方々だったようです。本当に人はどこかで繋がっているものだとしみじみ思いました。ガリーナさんは夢の世界のようだ、と館内を見て写真を撮ってまわっていました。

3時にはタクシーで日露青年交流センターへ。急なお願いにも関わらず、大久保さんが快く迎えてくれて長時間割いて話を聞いてくれました。ロシア語も堪能なので話もスムーズ

その日の夕方は赤坂の店で、ちょっと騒がしいが広いテーブルを占領して鍋料理を囲み、昨年エカテリンブルグを訪問した中村泰弘常任理事、草月流(活け花インターナショナルにも所属)の松村み子先生ご夫妻と再会。ご夫妻は英語が堪能なので、専門分野の話も直接聞き話を交わすことができ忘れられない夜となりました。

翌日は夕方からロシア大使館で新年会。ぎりぎりでお二人を招待枠に入れてもらって、杖が離せないワレンチンさんのためにエレベーターを使わせてもらいました。ガリーナさんたちにはガルージン大使、チトフ参事官、エレナさんなど大使館の方々や、服部副会長や内堀専務、ロシア語の先生方等々ご紹介してできるだけ多くの方と話していただきました。ワレンチンさんは日本語堪能で明るい性格なので、自然に周りに人々が集まっているようでした。

エカテリンブルグを訪問する日本人は、その歓迎振りに必ず驚くことでしょう。この街の人々との関係は未永く続けていきたいと強く思うのです。(常任理事)

お知らせ

●第69回マトリョーシカ絵付け教室

日時: 2020年4月12日(日) 13:30~16:00

場所: 田町「リーブラ」造形表現室

会費: 3,000円(お好きな教材セット、お茶代含む)

講師: 菅野エレナ

*6月27日(土)28日(日)開催の「男女平等参画フェスタ in リーブラ2020」に参加予定です。マトリョーシカの展示即売、体験などもありますのでお楽しみに。

●第20回通常総会のお知らせ

日時: 2020年3月28日(土) 13:10~14:00

場所: 新橋生涯学習センター「ばるーん」304号室

*出欠のご返事を3月16日までに返信用はがき、またはFAXにて必ずお願いいたします。

●ロシア語クラス生徒募集中!

見学希望の方は事務所までご連絡下さい。

0からクラス、初級、準中級、中級、上級、翻訳クラス等レベルに応じて参加できます。月4回、5500円x3ヶ月分前納
*3月は休講になりますので4月以降に見学ご希望の際は必ずご連絡ください。

*お問い合わせ、お申し込みは協会事務局まで

Tel: 03-5563-0626 nichiro@nichiro.org

お願い

NPO日口交流協会では、ロシアでの日本の伝統文化などの紹介、国内でのロシア関連の学習会、ロシア人とのイベント交流など幅広い活動を続けています。これらの活動を一層推進させるために皆様からのご寄付をお願い申し上げます。一口千円から、いくらでも結構です。

振込先: 郵便口座 00160-9-66486、加入者: 日口交流協会
連絡先: 日口交流協会事務局 E-Mail: nichiro@nichiro.org
*関根礼子様、北澤隆法様からご寄付を頂きました。ご協力有難うございます。

函館「旧ロシア領事館」をめぐる新たな動き

倉田 有佳

去る2月13日付『函館新聞』の一面に、函館市が旧ロシア領事館の利活用についてプロポーザル(提案型公募)の実施に踏み切ることとし、来年4月から公募を開始する、と報じられた。

「旧ロシア領事館」の建物は、1996年までの約30年間、函館市民や道南地域の青少年のための宿泊研修施設「函館市立道南青年の家」として活用されていた。現在30代半ば以上の函館市民であれば、函館港を一望できる場所に建つ洋館、庭で行われた朝の旗掲揚、夜になると出ると噂された幽霊伝説などを思い起こすことだろう。観光客は、由緒ある建物、そして建物内に設けられた「旧ロシア領事館資料室」(1985年に開設)見たさに、長く急勾配の幸坂を上っていった。筆者もその一人だった。

現在は、「旧ロシア領事館」の建物・土地共に函館市が所有しているが、元はロシア政府が官費で建てた建物で、京都の同志社大学のクラーク記念館(重要文化財指定)を手がけたドイツ人建築家リヒャルト・ゼールが設計した。1906年12

月に完成するが、翌年の「明治40年の函館大火」で一帯は焼失。煉瓦造のペチカの煙突を数本残し、木骨煉瓦造の領事館は全焼した。だが、同じ場所、当初とほぼ同じ設計で再建工事が始まり、1908年末に完成した。これが現存する「旧ロシア領事館」である。

20世紀前半の函館は、露領・北洋漁業の基地だった。



函館のロシア・ソ連領事館の主たる業務は、オホーツク・カムチャツカ方面に向かう日本船の証明書や漁業関係者に対する査証(ビザ)の発給だった(モスクワに行くには東京の大使館で申請・取得が必要とされた)。

領事館は領事公邸でもあった。二階に領事一家が暮らし、一階の食堂やサロンでは、帝政時代は領事夫人のピアノが披露され、ロシア革命後は、革命15周年の祝宴や新任領事の着任祝い催された。1932年11月26日付『函館日日新聞』は、函館市・商工会・日魯漁業協会の代表など20数名の日本人が、領事の着任を祝う晩餐会に招待され、シャンデリアの下でウオッカやコニャック、西洋料理が振る舞われると、「主客とも大いにメートルをあげてすさまじい気焔をはき、駄洒落を飛ばして打ち興じた」、と伝えている。

領事館は1944年10月1日に閉鎖となった。戦後、函館市民は積極的に誘致活動を行うが、総領事館が置かれたのは札幌だった(1967年開設)。

2003年9月、函館の領事館が閉鎖されて59年目に在札幌ロシア連邦総領事館函館事務所が設置された。しかし、諸事情により、「旧ロシア領事館」に事務所が置かれることにはならなかった。

築112年を迎える建物も、使われなくなって20余年。老朽化は年々進む。今回の市の公募に対して、民間事業者がどのような提案をしていくのかわからないが、一刻も早く再生され、願わくば、写真か銘板を建物内に設置し、ここが函館とロシアの交流の舞台だったことを伝えてほしい。

(ロシア極東連邦総合大学函館校教授)



大使館の方々との相撲観戦

千葉 麻里

今年も大使館の方々からのご希望もあり、1月場所(18日土曜日)のチケットを予約しました。大使館からは30名、協会から5名の参加で、当日は3時過ぎ頃から両国国技館の指定席に集まってきました。私達はいつも団体枠で早めに予約するのですが、油断しているとすぐに売り切れになるほど相撲人気はまだ衰えていないようです。特に後ろのほうの椅子席には海外からの観光客などが多く、前も左右も英語などが行き交っています。体が大きい方にはちょっと窮屈な座席のようですが。

最近は大館の皆さんも慣れてきて、以前のように幟の意味、何を叫んでいたのか、とか、審判はどこか等々の質問がなくなってきました。声を上げて応援したり、鬘の力士も出てきて、その力士の名前を番付表で探したりするなど楽しみ方も変わってきています。相撲はこんなところが面白い、とかえってロシアの方に力説されたりするので相撲観戦の行事もすっかり定着したと思います。

幕下の狼雅という力士は、顔も日本人とそっくりでモンゴル出身かと思っていました。が、ロシア出身ということで、2月21日のロシア大使館でのパーティーにも出席していたので驚きました。パーティーでも相撲ファンのロシアの方々にも囲まれて写真を撮られたり大忙しでした。思ったより大柄で

なく日本語も流暢で、「よく日本人に間違えられるんです」と語っていました。これからの成長が楽しみです。

国技館はつくりがよくできていて、野球と比べると一番後ろからでも土俵がよく見えるので臨場感があると思います。力士が闘争心に火をつけていく様子もよくわかり、ビデオに収めることもできるので相撲を知らない人でも自然に楽しめるのでしょう。観戦しながら飲食もできるし、内部の博物館やちゃんこ鍋の試食も楽しみのひとつです。コロナウィルスで様々な行事が延期や中止になっていますが、早く収まって欲しいものです。次の5月の東京場所もできれば皆さんと行きたいと思っています。

鬘の力士が出終わると、最後の人ごみを避けて少し早めに帰る方もいました。私達は最後まで見て、皆さんが帰られるのを見送ってから駅の近くで夕食を済ませて帰りました。

今回は、第1回目のハバロフスク夏期短期留学に参加したお二人の方々とお食事して、そのときの思い出やロシア語の勉強について色々とお話することができました。他の語学学校での情報なども聞き非常に参考になりました。

会員同士の話し合いや要望を聞く機会が、行事の中で意外に少ないのも残念です。双方の希望を叶えつつ交流できる催しをもっとできないものかと思いつつ帰路につきました。

● 広報部宛、ご投稿、ご意見をお待ちしております

ダイヤモンド・プリンセス号に乗ってサハリンへ

畔上 明

新型コロナ・ウィルス騒動によって注目を集めた大型客船「ダイヤモンド・プリンセス」号。私のような旅行業界に身を置く立場としては、そのスタッフの陰の苦勞について意識が向いてしまいます。

さて、2年半前の2017年秋、私は一船客として「ダイヤモンド・プリンセス」号でのクルーズを体験してきました。

北海道を周遊しサハリン島のコルサコフに向かう航路が千島列島のエトロフとウルップの間を通過するという謳い文句に先ず惹かれたこと、さらにコルサコフを含むロシアの主要な港町では72時間以内のクルーズ船での寄港であればビザを必要としないということもあり、その状況を見ておきたいという思いもありました。

9月18日に横浜港を出港して三陸沖を北上、最初の寄港地釧路から、知床沖、千島列島を通過したのち、サハリン上陸、小樽、函館、そして横浜に戻る10日間の船旅というツアー、参加者の半数は日本人 1,393名、アメリカ人 389名、オーストラリア人 222名、イギリス人 214名、台湾人 79名、カナダ人 69名、インドネシア人 56名、その他 222名の計2,644名という構成だったのですが、何と出発前日に西日本を廻っていた船が台風の影響で横浜に戻ってくることが出来ず、船会社は全員の参加予定者と連絡を取合い、一日出発を遅ら



せ釧路、知床沖をカットして9日間のツアーへと変更すること、それに伴う旅費の減額、お詫び金は船内カードにデPOSITする条件によって、もれなく全

員再参加の確認を得て、9月19日の出発となったのでした。

いつのまにかビルが建ったのではと見間違えるばかりの巨体が横浜大榎橋に接岸、総トン数 115,906GT、乗客定員 3,100名、乗組員 1,060名、全長・全幅 288.33m x 37.5mとその規模に驚かされます。

船内での食事は、ビュッフェであれば好きな時間に各国の方々と相席し、和朝食や夜のコース料理はテーブル指定、料理長はイタリア人、ウェイターはフィリピン人、インド人、中国人など多彩な顔ぶれ、ヘア・サロンに出向けば、ジンバブエの黒人美容師による丁寧な散髪、夜のエンターテイナーにロシア出身者がいて、コルサコフ到着前には即席ロシア語講座を開いてくれました。

9月21日突如船内通達があり、台風のしわ寄せによる船長の急遽の判断で、オリジナル・ルートの千島列島方向へは進まず、津軽海峡を抜けて北海道西海岸を北上する往復同ルートへ変更とのこと、その決断は私たちの期待に相当大きなダメージをもたらし、様々なルートを通じて抗議したのですが、船長決断は覆すことが出来ませんでした。

9月22日コルサコフ到着、沖止めとなった「ダイヤモンド・プリンセス」から、6艘のテンドーボートをピストン運航させて、順次コルサコフ港上陸。早朝のボートで上陸し夕刻のボートで戻ることを画策していたものの、オプション参加による番号順で乗船ボートが指定され、コルサコフ市内巡りもその年ロシア革命100周年を思い起こしてくれたレーニン像が立つ広場、そして文化会館でのロシア民謡鑑賞で終わるや自由に大泊時代の痕跡をたどるなど時間が許されず早々に本船へ連れ戻され、後ろ髪引かれる後悔の航海でした。

(「プロコ・エアサービス」シニア・アドバイザー)



「そうか、もう君はいないのか」

大原 翔

今日、特殊言語といえ、おそらく、アジアやアフリカ等の話者の数が少ない外国語を多くの人が連想するのであろう。かつては、ロシア語を学んでいると「特殊言語を勉強しているんだね」と言われた時代があった。

昨今、東京などの繁華街の雑踏や電車の中でロシア語を耳にすることはそれほど珍しいことではない。電車と同じ車両からロシア語が聞こえてくるとき、悪趣味ながら、盗み聴きするのが、ある先輩のひそかな老後ならぬ露語の楽しみであるときいたことがある。電車に乗り込んできたロシアの人々は、特殊言語(とたぶん思っている)のロシア語を分かる日本人が、電車の中にいるはずないと思いついでいるのであろうか。

ロシア語は、キリル文字を使っているせいか、他の人にわからぬように書いておくのに利用することができるようだ。二葉亭四迷が、サンクト・ペテルブルク滞在中に書いた日記の中に、「Ж」の一文字があり、何やら他人に見られたくない言葉の隠語であつたらしい。後世の研究者が、これは、女性を意味する「Ж」のことなのか、あるいは名前のジェーニヤの最初の文字なのか、頭をひねっているとのことである。

一方、経済小説の有名な作家、城山三郎の「そうか、もう君はいないのか」(2008年)にも、亡くなった夫人を意味するところに「È」(夫人の名前、容子の最初の音)を使っていたことが書かれている。小説家城山三郎は、ロシア語を学んでいたのかもしれない。城山三郎も他人に気づかれぬようにキリル文字「È」を使っていたのは興味深い。このようなロシア語の特殊な用法も、学習者が増えれば増えるだけ、その効用が徐々に薄れていくのであろう。

ロシア関係の諸先輩の話を押聴するとよくでてくる話がある。それは、1964年の東京五輪当時、TV中継で見たソ連選手の活躍である。そして、活躍するソ連の選手のユニホームに書かれた CCCP は、当時まだ子供であった諸先輩に強い印象を与えたようだ。USAはわかるが、あの「シー・シー・シー・ピー」とは何のことなのか。

ロシアという国もかつての否定的なイメージがだんだん薄れていき、言語も特殊なものと思われなくなっていくことは、良いことであろう。一方で、作家の言葉をまねて、「CCCPよ、そうか、もう君はいないのか」という人もいるかもしれない。(2020年02月記)



～追憶のロシア (20)～

サマーラ紀行 (1)

岡田 和也

2016年4月号以来、4年振りの寄稿となりますが、よろしくお願いたします。一昨秋、ヴォールガ河畔の町サマーラを訪いましたので、その時のことを数回に亙り綴らせていただきます。

不思議なご縁で、その年の春、若かりし頃に通っていた舞踏のワークショップで一緒した友人を通じて面識はないもののフェイスブックの友達になっていた人形遣いの黒谷都さんより、ご叮嚀なお便りを戴きました。何でも、秋にサマーラで催される国際人形演劇祭に随行する通訳を探しておられるとのこと。一行は五名、旅費と食費と宿代と謝礼は主催者の負担、私の役目は通訳と査証の取得と飛行機の乗り継ぎのお手伝いとのことでしたが、荷が重いような気がして一旦はお断りしたものの、露西亜への郷愁は已み難く、お受けすることにしました。「ナポリを見て死ね」という俚諺がありますが、「ヴォールガを見て死ね」に近い心境だったのかも知れません。

私は、1989年から20年余り国営放送局員として極東のハバロフスクに暮らし、父なるアムールは局舎から毎日のように眺めていましたが、母なるヴォールガは、レーピンの名画『ヴォールガの舟曳き』やズィーキナの唱う『ヴォールガは流れる Течёт река Волга』や民謡の『ステューニカ・ラージン』や『ヴォールガの舟唄』などを透して想いを馳せるばかりでした。因みに、一九三六年に日比谷公会堂でシャリヤーピンの独演会を聴いた作家の中島敦は、こんな歌を詠んでいます。舟唄の囁々[でうでう]として未だ消えずボルガの水面[みなも]を伝ふが如し。

~~~~~

～イルクーツク便り (4)～

## 留学生活7年を迎えて

阿部 耕大

読者の皆様初めまして。私は現在、ロシア・イルクーツクにありますがイルクーツク国立大学の大学院修士課程1年に在学中の阿部耕大と申します。昨年7月に同大学を卒業し、9月から今度は大学院生としてイルクーツクへ滞在しています。今年でイルクーツク生活は7年目に入りました。どのような経緯で大学院に入学したか、勉強の様子、シベリアでの何気ない日常風景などを書いていきたいと思っておりますので、興味を持っていただければ幸いです。

2019年7月、準備学部2年と学部課程4年の計6年に渡るイルクーツクでの学生生活を終え、日本でロシア語を使って働んだなあと思っていました。成績優秀者に送られる赤色の卒業証書を引っ提げて、現地のお友達とお別れし、帰国便の中では6年間のロシア生活の悲喜こもごもを思い出し、少し感傷的になって涙まで流して日本へ戻ってきたものの、実際には就活はおろかアルバイトすら採用されず(2週間で面接3連敗)早速日本での社会不適合者ぶりが露呈して途方に暮れていました。以前イルクーツクにいらした某商社の方に言われた“最初からロシア語ができる人材は別に要らなくて、必要に応じて会社が社員送って習得させるんだよね”っていう助言(又は嫌味)を思い出し、少し絶望して

8月、査証申請のために露西亜大使館の領事部へ午前9時半頃に伺うと、申請の人でごった返しており「樽の中の鯀さながら как сельди в бочке」。黒谷さんは67番の整理券を握り締めて私を待っていてくださいましたが、発行される整理券は七十枚とのことで間一髪。三時間ほど椅子に掛けてお喋りしながら待ち、窓口の閉まる間に手続きが済んで胸を撫で下ろしました。

9月13日、愈々露西亜へ。モスクヴァ行きのアエロフロート航空エアバスA330-300型機は、成田を定刻に離陸。隣席のSさんが機械音痴の私に操作を教えてください、タルコーフスキー監督の『ノスタルジア』を観始めるも音が出ず、ゲールマン監督の『ドヴラートフ』に替えると面白そうなので音が欲しくなり、橙色の制服の乗務員の女性にイヤフォンを交換していただいたり再起動していただいたりしたものの母が明かないのでしたが、幸い、復路では音声付きで鑑賞できました。

1970年代のネヴァー河畔を舞台に亡命前の作家ドヴラートフに光りを當てるこの作品は、実に味わい深く、ベルリン国際映画祭の銀熊賞受賞も宣なるかなと感じたことでした。来月には日本でも公開が始まるそうです。『ドヴラートフ レニングラードの作家たち』公式サイト <http://dovlatov.net/>。尚、この作家の『かばん』(ペトロフ=守屋愛訳)や『わが家の人びと』

(沼野充義訳)にも心を惹かれました。

(2020年2月19日 擲筆)



た矢先ロシア国費留学の試験に合格したとのメールが送られてきました。授業料は無料、毎月奨学金支給(3000ルーブル)という条件が良いのか悪いのか分かりませんでした。日本でアラサー無職として白い目で見られるよりか、またイルクーツクで学生生活続ける方がマシだと思い再び渡航することに決めました。ちなみにサンクトペテルブルグ国立大学の無料留学試験は書類審査の段階で落選。同校主催国際ロシア語オリンピックで優勝した際には入学試験で加点されるからぜひ我が校の大学院に来てねと言われてたんですが…。

そして8月が過ぎ、9月15日に少し遅れてイルクーツク国立大学の大学院に入学しました。行きの飛行機の中ではまるで実家に戻りするように留学する前の高揚感は何も。しかし別の不安がありました。なぜなら大学院でのクラスメイトは全員ロシア人、そして専門は“外国人の為のロシア語教授法”なるもの。(無料の枠はその専攻しかなかったのです)授業についていけるかな…と正直不安でした。まあそれはほぼ杞憂に終わるのですが、その話はまた次回。

大学の4年間共に勉強していたのは韓国人1名とモンゴル人1名(それぞれ途中で休学&退学)あとは全員中国人でした。もちろん授業は全部ロシア語でしたが、私も彼らも母語ではないのでとりあえずお互に通じればいいみたいな部分がありました。先生達も外国人にロシア語を教えることに特化した人達ばかりなので、発音や文法の間違いがあっても通じてしまう側面があったのは否定できません。そんな環境にいたからこそ全ての授業がロシア人と一緒ということにビビっていたのです。